なかよし

天童中部小学校
いちょう学級だより
R4.5.10
No. 4

自分で自分の伸びがわかること

Ａさんが教科書をもって、「ちょっといいですか？」とＢさんの教室へ入ってきました。Ｂさんの担任の私が、「はい。どうしたの？」と尋ねると、「今、ぼくの教室で教科書を読む勉強をしているんですけれど、静かなところで読みたくて。ちょっとここでいいですか？」と。「どうぞ。」とお返事すると、教科書を開き、指で文字をなぞりながらゆっくりと読み始めました。Ｂさんは、しばらく聞いて、「あ、私もその話、前に読んだよ。なつかしい～。」と話し、また聞き始めました。Ａさんが読みながら、「う～ん、これ、なんて読むのかな。」と漢字の読み方を私に尋ね、読み方がわかるとまた読み始めました。そのような調子で１ページ目を読み終わり、２ページ目も読み終わりました。次のページをめくると思って見ていたら、１ページ目に視線を戻しました。そして、また最初から読み始めました。２回目を読み始めたＡさんは、２枚目の写真のように、指にも肩にも力が入っていました。顔を教科書にグイっと近づけました。１回目に読み方が分からなかったところも、今度は自分で読み方を思い出して読みました。１回目に間違って読んだところは少し止まって、一息置いてから正しく読みました。「さっきよりもうまく読むぞ！」という気合が感じられました。明らかに１回目に比べると間違いもほぼなく、言葉の区切りも意識してはっきり力強く読めていました。すごいなあと思いました。でも、私からほめるような言葉を伝えるのは止めて、Ａさんに「１回目と比べてどう？」と尋ねてみました。「うん。さっきよりもいいみたい！」と少し照れくさそうに話しました。私もうれしくなって「そうだね！」と言葉を返しました。他者からの評価で得られる自信よりも、自分で自分の伸びを自覚できた時に得られる自信はより確かなものになるはずです。「〇〇さんが自分らしく伸びる」ために、自分の伸びを自覚できるような機会をつくることは大切だと思います。この後、Ａさんは３ページ目以降にもチャレンジし、最後の９ページ目の途中まで勢いよく読んだところで、読むのをやめました。疲れたのかもしれません。でも、Ａさんならきっとまた、しばらくしてチャレンジしたに違いありません。